

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第7回公開セミナー報告

タイトル：アフリカのアニメーション～その表現の挑戦～

日時：2016年1月21日（木）17時45分～20時00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア会議室（304）

司会：椎野若菜（AA研）

講師：クラベール・ヤメオゴ（Africartoons Studio）

コメンテーター：岡崎彰（AA研フェロー）

参加者：17名

内容：

今回のセミナーでは、西アフリカのブルキナファソ出身でありヴィジュアル・アートを専門とするクラベール・ヤメオゴ氏を講師として招いた。前半部では講師が制作したアニメーション「野ウサギとライオン」と「ソアンバ、サバンナの王様」の2本を、後半部では同じく講師が制作したドキュメンタリー「氾濫：プラスチックごみ」を上映したのち、作品について解説をしてもらった。そして、それぞれの上映・解説後にコメンテーターの岡崎彰氏がコメントをし、その後に全体での質疑応答と総合討論を行なった。

前半のアニメーションは、サバンナに暮らす野生動物が登場人物である民話をもとにした作品である。横暴なライオンを巧緻に長けたノウサギが罰するといったストーリーは、ブルキナファソでも人口に膾炙した民話だという。これに対してコメンテーターからは、アニメーションの題材となっているような野生動物を主役とする民話はアフリカ各地で見られ、とてもポピュラーなものであることが指摘された。また、そうした伝統的な民話が現代的なアニメーションへと作りかえられる時、それをアフリカ人がどのように受けとめているのか、また、実際にそれを見て楽しむアフリカ人がどのような層に位置するのかが問われていた。参加者からは、アニメーションのクオリティーの高さを称賛するコメントが出されたほか、具体的な制作方法についての質問が出されていた。一方、後半のドキュメンタリーは、現在アフリカ各地で大量に使用され、その後はごみとなっているビニール袋の問題を指摘する内容だった。講師からはこの問題の根深さと深刻さについての説明がなされたが、コメンテーターからはドキュメンタリーに必要なストーリー性が欠けているのではないかと指摘があり、参加者からはドキュメンタリー内に登場する人物についてのより詳しい説明が求められていた。日本は世界のなかでもアニメーション制作が盛んな国であるが、その一方で、アフリカにおいてアニメーションやドキュメンタリーの制作が今現在広まりを見せていることを研究者も知らない状況であった。今回のセミナーを通じて、現在のアフリカにおいては、口頭伝承で語られてきた民話がアニメーションとなったり新たに生じて

いる問題がドキュメンタリーとなったりするなど、アフリカ自身の手によって新しい形で知識の
伝承や情報の発信、問題の提起が行なわれるようになっていることが明らかとなった。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.